

学校と墓地 ——『ニコラス・ニクルビー』と『骨董屋』における 共感の教育 (1) ——

玉井史絵

はじめに

チャールズ・ディケンズは第三作目の小説となる『ニコラス・ニクルビー』(*Nicholas Nickleby*, 1838-39)を執筆する前の1838年2月、挿絵画家ハブロット・K・ブラウンとともに、ヨークシャーの寄宿学校への取材の旅に出る。この取材にもとづいて描かれたドゥ・ザ・ボーイズ・ホール(Dotheboys Hall)はヴィクトリア朝の劣悪な教育の実態を表す代表として、後世にその名を残すことになる。『ボズのスケッチ集』(*Sketches by Boz*, 1834, 36)の成功に始まり、作家として順調なデビューを果たしたディケンズが、『ピクウィック・ペーパーズ』(*Pickwick Papers*, 1836-37)と『オリバー・トゥイスト』(*Oliver Twist*, 1837-38)に続き、新たに小説を執筆するにあたってヨークシャーへの旅に出たのには、前作品を越えるような何か大きいことを成し遂げたいという野心もあったのであろう(Ackroyd 268)。教育は当時、多くの人々の関心を集めた社会問題であり、新聞記者から作家への転換を図ろうとしていたディケンズは、教育を扱うことでより深く社会を洞察しようとしたのかもしれない。

ドゥ・ザ・ボーイズ・ホールのような下層ミドルクラスの子弟のための私立の寄宿学校は1820年代以降急速に増え始め、一部の学校の劣悪な教育環境は、当時の雑誌でもしばしば取り上げられた(Simon 112-114)。ディケンズは1848年版の序文のなかで、「イギリスにおける教育の甚だしい放置状態のなかでも……私立学校のそれは目に余るものがあった」(lii)と述べ、とりわけ「ヨークシャーの教師はすべての教師の中でも最悪で最も腐敗していた」(lii)と弾劾している。じっさい、ディケンズの告発は現実社会にお

『コミュニカール』9 (2020) 21-40

©2012 同志社大学グローバル・コミュニケーション学会

いても一定の成果を上げた。小説の発表後、ヨークシャーの学校は世間の人々の厳しい批判の眼差しにさらされることとなった。そして、その結果、児童数が減少し、多くの学校は廃校に追い込まれたのである。ドゥ・ザ・ボーイズ・ホールのモデルとされるボウズ・アカデミーは、1840年の『タイムズ』に広告を出したのを最後に、姿を消している（Ackroyd 272）。ディケンズも自らの成果を誇り、「ヨークシャーの学校教師は完全に消滅したわけではないが、日々確実に減少している。たしかに、教育には未だやるべき仕事が多く残っているとはいえ、近年、改善に向けて大きく前進している」（lii-liii）と高らかに宣言している¹。

このような『ニコラス・ニクルビー』での成功は、ディケンズに自らが持つ影響力を自覚させ、その後のディケンズの社会改革への積極的関与を決定づけたと言ってよい²。なかでも教育はディケンズが生涯にわたって関心を持ち、取り上げ続けた問題であったが、ディケンズの初期小説における教育の問題は、とりわけ重要な意義を持っているように思われる。まだ駆け出しの作家であった若き日のディケンズは、学校を描くことを契機として、読者に対する自らの教育的役割を問い、公教育とは異なる教育を読者に施そうとしたのではないか、というのが本論の主張である³。以下の議論では、このことを検証するために、二つの学校を取り上げる。一つは『ニコラス・ニクルビー』におけるドゥ・ザ・ボーイズ・ホール、もう一つは、次作『骨董屋』（*The Old Curiosity Shop*, 1840-41）における村の学校である。これら二つの学校は明らかに対照的である。前者では残酷で暴力的な教師が無力な子どもたちを抑圧し、搾取するのに対し、後者では優しく穏やかな教師が活力溢れる子どもたちを制御できずにいる。しかし、いずれの学校も子供にとって有害であるか、あるいはせいぜい無力な機関に過ぎない。また、その教育の犠牲者として子どもが死ぬという点においても、この二つの学校は奇妙にも類似している。以下の議論では『ニコラス・ニクルビー』と『骨董屋』における公教育の描写と、作家による読者の教育について検証していく。

ディケンズはヨークシャーへの取材旅行から約一年後の1838年12月29日の手紙のなかで旅を振り返り、ボウズ・アカデミーの校長ショーとの面会后、学校近くの古い教会の墓地を訪れたときのことを次のように記している。

あの荒涼とした冬の午後、私が最初に目にした墓石は、18歳で——墓碑銘によれば突然——亡くなった18歳の少年のものだった。おそらく彼の心は壊れてしまったのだろう——ラクダが背に寄せられた最後の荷の重荷に耐え切れずに「突然」崩れるように——こんな惨めな場所で死んでしまったのだ。この瞬間、彼の霊によって、私の脳裏にスマイクが宿ったのだと思う⁴。(Letters I: 482)

良きにつけ悪しきにつけディケンズの名声を不動のものとした、死を運命づけられたセンチメンタルな犠牲者としての子ども像が生まれた瞬間が、この回想には記されている。子どもを育て、その成長を促す場であるはずの学校は、子どもの死と分かちがたく結びつき、その欠陥と限界を露呈する。そして、その犠牲となった子どもの死を描くことで、ディケンズは学校に代わって読者を教え導き、作家の地位を不動のものとしていくのである。

1. 小説と学校

啓蒙思想の影響を受けて18世紀終わりごろから始まった個人による教育改革の試みは、19世紀になるとより組織的になり、徐々に国家レベルへと広がっていった。1832年の第一次選挙法改正により社会的影響力を増しつつあったミドルクラスは、自らの階級の教育改革を推進すると同時に、労働者階級の教育にも積極的に関与し始めた。1833年からは、国教会系の「国民協会」と非国教会系の「内外学校協会」が行う初等教育に国庫助成が投入されるようになり、普通教育へ向けた第一歩が踏み出された (Simon 72-175)。ダイナ・バーチは、教育の普及が国家と国民生活の向上にとって決定的に重要なプロセスだと最初に認識したのはヴィクトリア朝の人々であったと述べている。この認識のもと、生徒にある一定の課程を修めさせ、その成果を試験によって測るといった、今日にまで通じる学校制度の基盤が築かれていった。システムティックな教育に対するヴィクトリア朝の人々の信念は揺ぎなく、様々な人々が様々な利害のもと、教育改革に携わった (Birch 1-4)。

19世紀に入って新しい読者層に向けて作品を発表した作家たちもまた、

教育に大きな関心を持ち、教育的役割は作家という職業の一部であるとの自覚を持って創作に携わった。アンソニー・トロロプは、小説家は読者にとって精神的支柱となる聖職者に等しい存在であり、読者を愉しませつつ導き、道徳的に教化するのが小説家の義務であると考えた (Birch 5)。ウィリアム・ワーズワスは、詩人があからさまな道徳的教師となることには否定的であったが、貧しき者と共感し、彼らのことばを代弁することにより、普遍的人間性を表現するのが詩人の役割であるとの認識を持っていた (Birch 12-19)。ディケンズもまた、自らの教育的役割を意識した作家のひとりである。彼が信じる作家の教育的使命とは、読者を愉しませつつ弱者への共感を喚起して、社会改革を実現するということであった。その信念は『ハンフリー親方の時計』 (*Master Humphrey's Clock*, 1840-41) のなかの、「通り過ぎる者のなかの最も卑しい者にも思いを向けるよう、人間の形を持つ誰からも、驕り高ぶって目を背けることがないよう」(109) といった言葉に端的に表現されている。この信念の確立に大きく関わっているのが、『ニコラス・ニクルビー』と『骨董屋』における教育と子どもの表象である。

近代の教育と作家の役割について考えるとき、ミシェル・フーコーの『監獄の誕生』 (*Discipline and Punish*, 1975) における議論は示唆に富む。フーコーは17世紀から18世紀以降、身体の完全な制御を目的とする規律が支配の一般的な形となり、「従順な身体」(docile body) を生み出す学校教育がそれまでの徒弟教育に代わって発展していったと論じる。身体は活力に満ちた有機体ではなく、権力によって支配され操作される対象となり、学校は規律を教え込む訓練の場となった。権力の完全な行使を可能とする場として、フーコーが学校を病院、工場、牢獄と同列に置いたことは興味深い (Foucault 135-215)。フーコーの理論的枠組みのなかでは、小説もまた、規律を読者に教え込む権力の一部となる。D・A・ミラーは『小説と警察』 (*The Novel and the Police*, 1988) において、ヴィクトリア朝小説が権力の影響下での自己形成の物語を構築することにより、管理統制のメカニズムの一翼を担ったと論じている。しかし、こうした権力の作用を絶対視し、小説も権力構造の一部とみなす議論には反論も多い。ローラ・C・ベリーはヴィクトリア朝小説に描かれる犠牲者としての子どもは、自律的で独立した存在であると同時に

に社会の影響下から逃れ得ない存在でもある自己を想像することを可能としたと論じる (Berry 4)。子どもとはジェンダー、階級、人種を問わず、誰しものが経験する成長の一段階であり、社会からの制約を受けない無垢の象徴である一方で、自己の外側にある社会の影響からも逃れ得ない。本論では、この犠牲者としての子ども像に着目しつつ、規律の教育に対するディケンズの態度を検証する。

学校、病院、工場、牢獄という権力構造に組み込まれた場所の対極にあって、権力の及び得ない自由な場所がディケンズの小説には存在する——墓地である。先に引用したヨークシャーの墓地での体験を語ったディケンズの手紙において、犠牲となった子供は霊 (spirit) となって作家の心に入り込み、作家にインスピレーションを与える (と少なくとも作家は感じた)。学校が教師のつかさどる身体領域であるとするなら、墓地は作家のつかさどる精神領域であり、犠牲者の子どもの霊を通して、作家が読者に共感の教育を与える場となる。以下の議論では、『ニコラス・ニクルビー』と『骨董屋』における学校と、最終的には墓地に埋葬される犠牲者としての子どもの表象を分析することにより、ディケンズがいかに公教育を批判し、それに代わる作家の役割を定義したのかについて考察していく。前半にあたる本稿では、二つの小説のうち『ニコラス・ニクルビー』に焦点をあてる。

2. 学校の教育とその限界

ディケンズは 1848 年版の序文のなかで、ヨークシャーの学校に関心を持つに至った理由を幼少時代の思い出に遡って次のように説明している。

私がまだひ弱な子どもで、ロチェスター城の傍に座ってパートリッジ、ストラップ、トム・パイプス、サンチャョ・パンサといった人物で頭がいっぱいだった頃、どのようにヨークシャーの学校のことを知るに至ったのか、今となっては明瞭に思い出すことはできない。けれども、ある少年が化膿した腫物を抱えてヨークシャーから戻ってきたことが、何らかの形で学校の印象と関わっている。訓導、哲学者、友人と称するヨークシャーの教師が、インクのついたペンナイフで腫物を切開した結果、

化膿したようだ。その話は私の心に強烈な印象を残し、決して離れることはなかった。(liii)

ロチェスターはディケンズがロンドンに引っ越す前、幸福な幼少時代を過ごした街であり、この一節も牧歌的過去の幸福感に満ちている。当時の思い出はフィールディング、スモーレット、セルバンテスといった作家の登場人物たちと結び付けられ、空想の世界に浸る幸せな子どもという自己像を形成している。そんな平和な子どもの日常に突然現れたのが、ヨークシャーの学校で受けた虐待の結果、化膿した腫物を抱えて帰郷した少年であった。ヨークシャーへの旅に出かけた作家ディケンズの心には、幼少時代に会った暴力の犠牲者である少年の姿があったのである。この少年の思い出に、自身が通った学校の校長ジョーンズによる暴力の記憶、さらには、先に引用した墓石で得たインスピレーションが加わって、ドゥ・ザ・ボーイズ・ホールという学校がディケンズの想像力のなかで形成されていった。

『ニコラス・ニクルビー』には、様々な形で暴力に満ち溢れた世界が描かれている。マイロン・マグネットは「『ニコラス・ニクルビー』は単に攻撃性についての小説ではなく、攻撃性に取りつかれた小説である」と述べ、この小説が、文明の抑止力無くしては、社会はホブズ的な原初の闘争状態に陥るといふ、ディケンズの信念を描いた作品であると論じる (Magnet 11)。ドゥ・ザ・ボーイズ・ホールはそうした野蛮な暴力がはびこる社会の縮図ともいえる場所として表象されている。学校とは名ばかりで、子どもに対する教育が施されることはほとんどない。教育の場というよりはむしろ、経済搾取の場であり、子どもに対する体罰が横行している。当時の雑誌においても、寄宿学校の経営が公的責任を何ら自覚していない民間の手に委ねられていることが度々批判されていた。1834年の『教育の季刊誌』(*Quarterly Journal of Education*)に掲載された「イギリスの寄宿学校」と題する記事において、筆者は教育が「多くの場合単なる商売になりさがっている」(38)現状を嘆いている。ドゥ・ザ・ボーイズ・ホールの校長スクウィアーズは、まさにそのような学校を商売と考える校長の一人であり、彼の考えは徹頭徹尾、功利主義的な損益計算によって支配されている。雑役夫としてこき使わ

れる孤児スマイクに関して、スクウィアーズは「あいつは外の仕事には便利な奴だ。とにかく肉と飲み物をやるだけの値打ちはある」(80) と言って、経済的な利益を強調する。また、入学した子供たちが持参した所有物は、すべて没収して息子に与える。そして、このような搾取の上に成り立つ学校経営は、スクウィアーズ自身の言葉によって、奴隷制というもっとも暴力的な支配形態と結び付けられる。ニコラスを雇う理由について彼は、「西インド諸島の奴隷所有者は、黒人が逃げたり、反乱を起こしたりしないよう監視する男を雇っている。わしも、わしらの黒人を同じように監視してもらう男を雇うのだ」(99) と妻に説明する。これらの比喻によって、資本主義の経済搾取に組み込まれた学校の非人道性が強調され、無力な子供たちの悲惨な状況が浮き彫りにされるのである。

ドゥ・ザ・ボーイズ・ホールがいかに前近代的な身体的暴力に満ちた場であるとはいえ、少なくとも子どもたちの身体が教員の監視と管理下に置かれているという点においては、フーコーの言う近代の教育にも通じるものがある。スクウィアーズの行う授業では、学習と身体が密接に結びついている。「我々は実践的な教え方を取り入れている」とスクウィアーズはニコラスに言う。

「C・l・e・a・n——掃除する。動詞、能動態、きれいにする、ごしごし磨く。W・i・n, win, d・e・r, der——まど、窓。子どもがこれを教科書で習ったら、そいつはすぐに出て行って、それを実行するのだ。」(90)

この場面において学校はまさに、労働者の「従順な身体」を形成する場として機能している。スクウィアーズの学校において、子どもたちの身体を管理するもう一つの方法が食事である。ドゥ・ザ・ボーイズ・ホールに関連する章ではとりわけ食事の場面が多く描かれている。こういった場面で強調されるのは、スクウィアーズの旺盛な食欲とは対照的に、十分な食事を与えられない子供たちの空腹である。ロンドンから4人の新しい生徒を連れてヨークシャーへ旅立つ日の朝食では、スクウィアーズはビーフとパンを食るが、子

供たちには水で薄めたミルクを一口ずつ順番に飲ませ、わずかなパンしか与えない。子どもたちに大きなスプーンで十分に与えられるのは、懲罰のために与えられる下剤の硫黄と糖蜜だけである。そして、子どもたちに対して、「欲望を抑えろ。食べ物を欲しがってはならぬ」、「食欲を抑制すれば人間の本性を制御できる」(45)と説教をする。ドゥ・ザ・ボーイズ・ホールは前近代的な暴力性ととともに、子どもたちの精神と身体両方の自由を制御し、規律を教化するという近代的側面をも持ち合わせた学校なのである。

ベリーは、空腹の子どもの表象について、興味深い議論を展開している。ヴィクトリア朝において空腹の人々のイメージは、安定的な階層的社会の転覆に対する恐怖を読者に呼び起こしたとベリーは指摘する (Berry 8)。空腹は通常、食欲旺盛な成人男性として表象される。そして、その脅威の根源には、空腹の身体は多くを食べ、多くの子孫を残すが、食料の生産は人口の増加に追いつかないというトマス・マルサスの『人口論』(*An Essay on the Principle of Population*, 1798)があった。空腹の身体は食料だけではなく、食卓の席、すなわち社会的地位をも求める。ゆえに、空腹、特に成人男子の空腹は、水平的な社会を志向して社会の安定を脅かす危機と捉えられ、表現された。その代表的な例が、メアリ・シェリーの『フランケンシュタイン』(*Frankenstein*, 1718)である。しかし、こうした成人男性の危険な空腹は、1830年代、1840年代の小説や社会改革を訴える文書においてはしばしば、子どもの空腹に置き換えられていくようになる。哀れな子どものささやかな要求は、不穏な暴動が頻発する時代にあって、ミドルクラスの読者の恐怖心を煽ることなく、心に訴えかける形で社会問題を呈示するのを可能としたのである (Berry 8-10)。

ドゥ・ザ・ボーイズ・ホールの空腹の子どもの表象の背後には、社会の安定を脅かす民衆の脅威を読み取ることができる。授業と食事によるスクウィアーズの統制は絶対的なものではなく、学校には不穏な空気が充満している。それはニコラスが初めて教室の子どもたちと対面した場面での、子どもたちの様子に如実に表されている。

まるで牢獄にいる悪人のごとく鉛のような眼をして何かを企んでいるよ

うな、邪悪な顔つきの男の子たちがいた。ひ弱な両親の罪が降りかかっているかのような、幼い小僧たちもいた。彼らは一人ぼっちで孤独の極みにあって、金目当ての乳母でさえもが恋しくて泣いていた。生まれたときに優しい思いやりや愛情などは打ち砕かれ、ありとあらゆる幼く健全な感情は、鞭によって打ちのめされ、飢えによって押さえつけられていた。そして、ありとあらゆる復讐心が胸いっぱいにもぐり、音もなくその芯まで浸食していた。ここでは何という地獄が生まれつつあったことであろう。(88)

ここで子どもたちは、ただ哀れを誘う無力な存在として描かれているわけではない。「悪人」、「邪悪な」、「復讐心」、「地獄」といった恐怖心を抱かせる言葉が、抑圧された民衆の脅威を暗示する。子どもたちの内面には、学校教育によって完全に制御され得ない復讐のエネルギーが蓄積されていて、いつかは爆発するであろうことが示唆されている。

以上見てきたように、ディケンズは、社会全体を支配する大きな暴力構造の一部として学校を捉え、服従を強い、「従順な身体」を形成しようとする規律の教育が反乱の危険性を孕んでいることを示唆した。社会に渦巻く虐げられし者たちの不満の爆発は、チャーチスト運動が高まりを見せつつあったこの時代にあっては、切迫した脅威と感じられたに違いない。トマス・カーライルは『チャーチズム』(Chartism, 1839)で、「イングランドの労働者階級のあいだで……憎悪に満ちた不満が勢いを増し狂暴になりつつある」(3-4)と述べ、危機感を露わにした。『ニコラス・ニクルビー』において、学校は資本主義的経済搾取の原理に組み込まれ、社会の不安定を招く病巣の根幹として描かれている。ディケンズはドゥ・ザ・ボーイズ・ホールの描写を通して、学校教育の限界を示し、それに代わる教育を呈示するのである。

3. 犠牲者としての子どもと共感の教育

ディケンズは『ニコラス・ニクルビー』において、不満のエネルギーを内に秘めたドゥ・ザ・ボーイズ・ホールの子どもたちに、いつ爆発するともしれない民衆の脅威を重ね合わせ、そのエネルギーを制御できない学校教育の

限界を示す。こうした民衆の脅威を抑止するべくディケンズが説いたのが、チアリブル兄弟に象徴される慈悲の心、特にミドルクラスの人々の慈悲の心の重要性であった。「社会に対して行うあらゆる攻撃において、ディケンズはいつも構造の変化よりは精神の変化を指摘しているように思われる。……「心の変化」がなければ社会制度の変化は無意味である——要するにこれこそが、彼が絶えず説いていることなのである」とはジョージ・オーウェルの有名な言葉だが（Orwell 22）、この「心の変化」（change of heart）のためにディケンズが行ったのが、読者に対する共感の教育なのである。ヴァレリー・パートンは、ヴィクトリア朝中期の人々にとって、「心」は人間の行動を左右するものであり、「頭」と同じくらい、「心」にも訓練が必要だと考えられていたと指摘する（Purton xx）。なかでもパートンは、当時四版を重ねたチャールズ・ブレイの『感情の教育』（*The Education of the Feelings*, 1838）とディケンズ作品の価値観の共鳴関係に着目する。パートンは自らの書の目的を「道徳教育の重要性を説くこと——またその上にいくつかの偉大なる真実を示し、創造主が創り給うた自然の法則を指摘し、それによって感情を鍛錬し陶冶すること」であると述べている（qtd. Purton 10）。ディケンズの初期作品もまた、こうした当時の議論を背景として、心の教育に携わろうとしたのであった。

共感の教育の鍵を握るのが、犠牲者としての子どもであった⁵。『ニコラス・ニクルビー』には後の小説『バーナビー・ラッジ』（*Barnaby Rudge*, 1840-41）のように、子どもたちの反乱が直接描かれていない。ディケンズは彼らの反乱を描く代わりに、スマイクというもともと無力で哀れな犠牲者を前面に押し出し、読者の共感を喚起する。そして、この共感の喚起こそが、身体をつかさどる学校教育に対抗して、作家が読者に対して行う精神の教育となる。ベリーが指摘するように、現実の社会問題を無害な子どもの犠牲者に置き換えることによって、ディケンズはミドルクラスの読者の心に訴えかける物語を創造しようとした。

スマイクはニコラスとほぼ同い年の18、19歳程度の少年という設定であるから、厳密には子どもという範疇には当てはまらないが、物語のなかでは、精神の発達を阻害された子どもとして登場する。

18歳か19歳以下ではなかつたろうし、年の割には背が高かつたが、通常は幼い男の子が着るような衣服の残骸を身に着けていたので、袖やズボンは滑稽なぐらいに短かつたが、そのやせ細つた体には身幅は大きすぎた。脚の下半分がこの奇妙な衣服に完全に合うようにするためか、もともとはがっしりした農夫のものであつたと見られる、折り返しつきの長靴を履いていたが、今では乞食のもののように、つぎはぎだらけで、ぼろぼろだつた。彼が何年間ここに住んでいるかは神のみぞ知ることだが、初めて連れてこられたときと同じものを着ているのであろう。というのも、首周りにはまだ子ども用のフリルがついていて、その半分が武骨な男物のネックチーフの下からのぞいていたからである。(79)

半分子ども、半分大人の衣服を身にまとつたこの奇妙ないで立ちは、スマイクが成長に必要な物資を与えられず、抑圧され、虐げられてきた境遇を雄弁に物語っている。しかし同時に、それでもなお伸び続けた手足は、どれほど苛酷な境遇に置かれても成長しようとする、原初的な生命力をも暗示している。ドゥ・ザ・ボーイズ・ホールの他の子どもたちと同様、スマイクもまた、マルサスの成人男子の身体が持つ脅威を秘めているのである。

しかしながら、ディケンズは二つの方法でスマイクの身体が持つ危険性を取り除き、読者にとってスマイクが、恐怖ではなく共感の対象となるようにしている。一つ目は、じっさいに反乱を起こし、スクウィアーズを打倒する役割を、スマイクではなくニコラスに担わせ、彼の怒りを代弁させるという方法である。虐待に耐えかねたスマイクが学校からの脱走を試みるも失敗し、スクウィアーズに捕らえられ鞭打たれているとき、無抵抗のスマイクに代わって怒りを爆発させるのはニコラスなのである。

「引き下がれ」とスクウィアーズは武器を振り回しながら叫んだ。「僕は長らくの侮辱に耐えきれず、復讐するのだ」とニコラスは怒りで真っ赤になって叫んだ。「この腐りきつた巣窟で無力な子どもたちに対してなされてきた、卑劣な仕打ちによって、僕の怒りは頂点に達している。気をつけるがいい。僕のうちに潜む悪魔が立ち上がれば、その威力

をお前の頭が思い知るだろう」(155)

ここでは、スマイクを含む子どもたちとニコラスとの奇妙な入れ替わりが起きている。ニコラスはスクウィアーズの学校での劣悪な待遇を耐え忍んだとはいえ、「長らくの侮辱」を受けてきた最大の被害者は子どもたちであり、その内に「悪魔」の怒りを募らせてきたのも子どもたちである。だが、子どもたちは「手も足も、微動だにせず」静かにこの光景を見守るいっぽう、ニコラスは「ありったけの力をこめて」(155) スクウィアーズを打擲する。ニコラスが子どもたちに代わって、彼らの声なき声を代弁し、暴力の復讐をとげるのである。この場面は、虐げられし者への共感にもとづき、不正を正し世の中を変えるというディケンズの社会改革の理想とも重なり合う。社会全体の比喩と捉えるならば、搾取される労働者が資本家に反旗を翻すのではなく、ミドルクラスの改革者が暴力的な支配者を打倒してアンシャンレジームを是正するという構図への転換が図られていると言えよう。

スマイクを共感の対象へと転化させる二つ目の方法は、彼の欲望の表現を抑制し、その危険な身体性を徐々に消し去っていくという手法である⁶。ドゥ・ザ・ボーイズ・ホールをニコラスと共に脱出した後のスマイクは、身体性と引き換えに内面性を獲得し、読者の共感を集める中心の人物へと変貌していく。ヨークシャーを出て、長旅の末にロンドンにたどり着いたスマイクは、当初は健全な食欲を持つ身体を取り戻したかのように描写されている。ニューマン・ノッグズの差し出すパンチを「驚きと喜びが奇妙に入り混じったいろんな表情」(172)を見せて喜び、用意された食事を満足して平らげるのである。だが、スマイクが素直に食べる喜びを表現する箇所は、この場面だけである。この後は食べる喜びに代わって、健全な身体が欲する食欲を満たすためには、わずかな食料を奪い合わなくてはならないという、マルサスの世界観が強調されるようになる。ロンドンでスマイクが食事を用意する場面が二度描かれているが(200、255)、いずれの場面においても二人は乏しい食料を分かち合っている。スマイクは、徐々に自分が食べるということは、ニコラスの取り分を奪うことだと気づき、「あなたはお金持ちではなく、自分自身のためのものですら十分に持っていないのだから、僕はここには

いけなかったんだ。あなたは日々痩せ、頬は蒼ざめ、眼もくぼんでいっている」(256)と言う。限られた食料しかない状況下では、健全なマルサスの身体は脅威となりうるということが暗示されているのである。こうした世界観は、食欲の抑制の必要性を説くスクウィアーズの教えにも通じるものがある。しかし、ディケンズがこの世界観に対抗して呈示するのは、身体の必要性を超越した精神の絆の重要性である。ニコラスは「君は僕の慰めであり、拠り所だ。世界中のものを与えられたとしても、君を捨てることはないよ」(256)と答え、スマイクとの友情を確認するのである。

全体の食料に限りがあり、誰かが取れば誰かが失うというゼロサムゲームにも似た状況は、ニコラスが善良で裕福なチアリブル兄弟と出会い、彼らの会社に雇われ成功を収めていく物語の後半部分において解消されていく。このデウスエクスマキナの後半部分に関しては作品発表当時から批判も多く、特に、チアリブル兄弟の人物造形には現実味が感じられないとの手厳しい批評があった。じっさい、チアリブル兄弟の庇護下でニクルビー兄妹が最終的には平和な家庭を手に入れるという結末は、あまりにも牧歌的で、マイロンが「攻撃性に取りつかれた」と評したこの小説の世界観からはかけ離れているようにも思われる。しかし、この牧歌的な世界は、スマイクの欲望の抑制の上に成り立っているという事実には、注目しなくてはならない。出世の階段を上り始めたニコラスとは対照的に、スマイクは（おそらくドゥ・ザ・ボーイズ・ホールで感染したであろう）結核に健康を侵され、ついには死に至る。病と共に食欲を失っていく一方で、ニコラスの妹ケイトに対して密かな恋心を抱きつつも、その秘められた愛を彼が語るのは、臨終の間際においてのみである。いわば、食欲と性欲という二つの身体の欲望を封印する代償として、スマイクは精神性を付与され、読者の共感を喚起する人物への変貌を遂げるのである。

その恐るべき病においては、魂と身体の戦いは徐々に、静かに、荘厳に交わされるが、勝敗は確実に定まっているので、日々、少しずつ、身体は蝕まれ憔悴し、それに代わって重荷から解放されつつある精神が軽やかで快活になっていく。そして、眼の前に永遠の命を感じ、死を限りあ

る命の新しい段階であると認識するのである。(676)

エリザベス・ガルガーノは、このような学校の犠牲者としての子どもの死は、「教師や両親だけではなく、ドゥ・ザ・ボーイズ・ホールやローウッドのような致命的な学校の存在を許してきた社会に対する、劇的な告発」であると述べている (Gargano 128)。スマイクの死が劣悪な学校環境への批判であることは疑いようもない。それと同時に、ディケンズはこの身体性を消し去った子どもの死の表象を通じて、ミドルクラスの読者が持つ民衆の脅威への不安を共感へと転換させ、彼らが受け入れられる形での資本主義社会への批判を行ったのである。

物語の終わり、ドゥ・ザ・ボーイズ・ホールは子どもたちの反乱によって解体する。スクウィアーズはニコラスの伯父のラルフとの奸計が発覚して捕らえられ、投獄されるが、この知らせが伝わったとき、「悪意ある群衆」(826)と化した彼らは、スクウィアーズの妻、娘、息子に対して積年の怒りを爆発させ襲いかかる。だが、この子どもたちの反乱は、スクウィアーズの不在があって実現したものであり、じっさいにスクウィアーズを罰したのは、彼の奸計を暴いて牢獄へ送り込むチアリブル兄弟の一団であり、子どもたちではない。ここでも、子どもたちからニコラス側のミドルクラスの人々へ、報復の主体の変換が行われているのである。いっぽう、子どもたちの反乱は、「女性を傷つけるな」(826)というジョン・ブラウディーのひと言によって、正当な怒りの表出ではなく、理不尽な暴力へと格下げされる。そして、反乱の後、ドゥ・ザ・ボーイズ・ホールを出た子どもたちは、社会を脅かす民衆ではなく、再び寄る辺のない哀れな子どもとして表象される。

このように、ディケンズが『ニコラス・ニクルビー』で展開した学校批判は、学校の枠を超え、経済搾取にもとづく資本主義の非人道性にまで及んでいた。しかし、自らもミドルクラスの一員であり、ミドルクラスの読者に向けて作品を書いていたディケンズは、民衆の反乱という切迫した危機を直接描こうとはせず、その代わりに無力、無害な子どもの犠牲とその死を描くことで読者の共感を喚起した。ディケンズの偉大さを示す技量の証であると同時に、過度の感傷主義とも批判される犠牲者としての子どもの表象であるが

(Schlicke xxix)、共感を喚起して読者の心を動かし、ひいては社会を動かすというその試みこそが、ディケンズが実践しようとした読者への精神の教育に他ならない。スマイクは、その最初の子どもとして、ディケンズの後の創作にも決定的な影響を与えたのである。

むすび

本論の第1節で引用した、ボウズ・アカデミー近くの教会の墓地での印象に戻ってみたい。虐待された子どもの霊魂は、ディケンズにスマイクという登場人物を想像するインスピレーションを与えた。しかし、当然のことながら、死者の霊魂がじっさいにディケンズに語りかけたわけではなく、ディケンズの想像のなかで、霊魂が生み出され、それがスマイクとなって結実したのである。ディケンズにとって、学校での犠牲者としての子ども像は、幸せな幼少時代に突然現れた暴力の象徴として、彼に付きまとうトラウマであったと言ってよい。牧歌的な幸福は一家のロンドン移住によって終わりを告げ、父の破産のために靴墨工場へ働きにいかされたディケンズは、労働者階級の苦しみを否応なく味わうこととなる。物言わぬ子どもの墓石に心動かされ、犠牲者としての子どもを創造した背後には、こうした作家自身の経験が重ね合わされている。墓石を見たときのディケンズが、「霊魂」の代弁者たろうとしたのは、ごく自然な心境の動きであったに違いない。

共感とは他者の視点に自らの視点を移して他者の気持ちを慮ることであり、「私」が他者の立場にたつて他者の苦しみに寄り添うことである。つまり、「私」と他者の境界を曖昧にして、他者の心に自由に入り込む魂の移動性が必要とされるのである。ディケンズの語る墓地での回想においても、ディケンズと墓石の下に眠る少年との境界は曖昧になっている。ディケンズは突然壊れてしまった少年の心を思い、それがスマイクという登場人物に結実していく。そして、スマイクを通じてディケンズは読者への共感の教育を行ったのである。

『骨董屋』について論じる後半部分では、こうした魂の移動性を軸に、学校がつかさどる身体と作家がつかさどる精神の教育について考察していく。

- * 本稿は科学研究費基盤研究（C）（一般）「小説と学校——十九世紀イギリス小説における文学と教育」（17K02523）の交付を受けて行った研究の成果である。

注

- 1 『ニコラス・ニクルビー』と当時のヨークシャーの寄宿学校における教育の問題との関連については、フィリップ・コリンズやアーサー・A・エイドリアンなどが検証している。ボウズ・アカデミーとその校長ウィリアム・ショーをめぐる裁判や証言、その他のヨークシャーの寄宿学校の実態についてはコリンズに詳述されている（Collins 98-112）。
- 2 アクロイドは、この小説が学校に与えた影響によって、ディケンズは初めて自らの持つ影響力に気づいたのではないかと述べている（Ackroyd 272）。
- 3 その社会的影響力にも関わらず、『ニコラス・ニクルビー』における学校をめぐるプロットは、あくまでも当時の社会での話題性を意識した一つのエピソードに過ぎず、小説全体には大きな意味を持たないとする批評家が多い。コリンズは、ヨークシャーでのニコラスの経験は小説全体の六分の一であり、エピソードの域を出ないと論じている（Collins 110）。西垣も教育という社会問題は、この小説に喜劇作品としてのまとまりを持たせるため、深く掘り下げられることはなかったと述べている（60）。こうした見解に対しガリア・ベンジマンは、読者への影響力を最大限高めることに成功したディケンズの力量を示す例として、ドゥ・ザ・ボーイズ・ホールの表象を取り上げ、評価している。
- 4 じっさいの墓石には、「ジョージ・アシュトン・テイラー、19歳」の名前が刻まれている（*Letters* I: 482n）。
- 5 ピーター・コヴニーは犠牲者としての子どもは敏感な感受性のシンボルであり、ヴィクトリア朝の物質文化のなかでの、人間の感性の状況を表していると論じる（Coveney 115）。
- 6 この身体性を消し去っていく手法は『骨董屋』のネルの描写でも用いられている。詳しくは玉井「包含と排除—『骨董店』における同情のメカニズム」を参照のこと。

引用文献

Ackroyd, Peter. *Dickens*. London: Minerva, 1991.

Adrian, A. Arthur. "‘Nicholas Nickleby’ and Educational Reform." *Nineteenth-*

Century Fiction 4. 3 (1949): 237–41.

Benziman, Galia. “Feeble Pictures of an Existing Reality:’ The Factual Fiction of *Nicholas Nickleby*.” *Dickens Studies Annual* 45 (2014): 95–112.

Berry, Laura C. *The Child, the State, and the Victorian Novel*. Charlottesville: UP of Virginia, 1999.

Birch, Dinah. *Our Victorian Education*. Oxford: Blackwell, 2008.

Bray, Charles. *The Education of the Feelings*. London: Taylor and Watson, 1838.

Carlyle, Thomas. *Chartism*. 1840. *Chartism and Past and Present*. London: Chapman and Hall, 1858.

Collins, Philip. *Dickens and Education*. London: Macmillan, 1965.

Coveney, Peter. *The Image of Childhood*. Harmondsworth: Penguin, 1957.

Dickens, Charles. *Nicholas Nickleby*. 1838–39. Ed. Paul Schlicke. Oxford: OUP, 1990.

———. *The Letters of Charles Dickens*. Vol. I: 1820–1830. Ed. Madeline House and Graham Storey. Oxford: OUP, 1965.

———. *Master Humphrey’s Clock*. 1840–41. *Master Humphrey’s Clock and A Child’s History of England*. Oxford: OUP, 1958.

“English Boarding-Schools.” *Quarterly Journal of Education*, 7.13 (1834): 36–46.

Foucault, Michel. *Discipline and Punish: The Birth of the Prison*. 1975, Trans. Alan Sheridan. Harmondsworth: Penguin, 1979.

Gargano, Elizabeth. *Reading Victorian Schoolrooms: Childhood and Education in Nineteenth-Century Fiction*. New York: Routledge, 2008.

Magnet, Myron. *Dickens and the Social Order*. Philadelphia: U of Pennsylvania P, 1985.

Miller, D. A. *The Novel and the Police*. Berkeley: U of California P, 1988.

Orwell, George. *Dickens, Dali & Others*. New York: Reynal & Hitchcock, 1946.

Purton, Valerie. *Dickens and the Sentimental Tradition: Fielding, Richardson, Sterne, Goldsmith, Sheridan, Lamb*. London: Anthem, 2012.

Schlicke, Paul. “Introduction.” *Nicholas Nickleby*. Ed. Paul Schlicke. Oxford: OUP, 1990.

Simon, Brian. *The Two Nations & the Educational Structure 1780–1870*. London: Lawrence & Wishart, 1974.

西垣佐里 『『ニコラス・ニクルビー』——喜劇としての暴力——舞台と社会の間』

玉井史絵

松岡光治編『ディケンズ文学における暴力とその変奏——生誕二百年記念』
大阪教育図書：2012年，53-67.

玉井史絵「包含と排除——『骨董店』における「同情」のメカニズム」『主流』
第67号（2006年）35-52.

The School and the Graveyard:
The Education of Sympathy
in *Nicholas Nickleby* and *The Old Curiosity Shop* (1)

Fumie TAMAI

Keywords: education, sympathy, victimized children

Abstract

It is well known that Charles Dickens took a trip to Yorkshire in February 1838 with his illustrator Hablot K. Browne in order to investigate the conditions of the notorious boarding schools there. After the success of his first two novels, young Dickens had an ambition to embark on something new and gain a deep insight into society by dealing with the then topical issue of education. This paper examines *Nicholas Nickleby* and *The Old Curiosity Shop* and argues that his experience of depicting schools made Dickens aware of the limitations of school education and become more conscious of the role of the author as a teacher who could cultivate the moral education of sympathy.

The first half of this paper focuses on *Nicholas Nickleby* and reconsiders the episode of Dotheboys Hall. In the novel, Dickens views the school as a microcosm of society dominated by violence and indicates the limitations of formal education which has been incorporated into a larger system of exploitative capitalism. Through the depiction of a victimized child, Smike, Dickens offers an alternative education of sympathy and tries to bring about what George Orwell calls the “change of heart,” which could ultimately lead to the “change of institution.”

